“蝦夷”と馬と尾駮の牧

六ヶ所村歴史フォーラム　2012年12月2日

東海大学文学部歴史学科　松本建速

1．はじめに　－本講演の二つの目的－

第1の問い：平安時代の歌に詠まれた尾駮の牧は、現在の六ヶ所村域にあったのか。

第2の問い：尾駮の牧を含む地域で馬を飼っていた人々は、蝦夷（えみし）だったのか。

・尾駮という土地ではなく馬を飼っていた人々が主人公。最初に、住んでいた人々を考察。

2．蝦夷とは誰か

（1）**これまでの蝦夷論**：古代日本国正史等の記録。異言語の民。878年に秋田でおこった元慶の乱の時期も異言語。在来縄文人の末裔。征討の対象。蝦夷は馬の民。

（2）**通説への疑問**：①蝦夷は在来の人々の末裔か。７世紀以降に東北北部東側に集落が突然増えたのはなぜか。②蝦夷は馬の民。馬飼が突然始まったのはなぜか。

（3）**東北北部の集落の盛衰**：６世紀の100年間、集落はほぼ知られず。５世紀後葉以降３度の移住の波。

①東側・７世紀以降に古代日本国域の生活様式を持つ集落が急増。第２期移住者の開拓。

②西側・９世紀以降に集落が急増。９世紀後葉、須恵器生産や鉄の生産も開始。第３期移住者の開拓。

③六ヶ所村域・９世紀後葉以降に集落が急増。第３期移住者の開拓。

（4）**馬飼の開始**：阿光坊古墳群(おいらせ町)の馬具を伴う７世紀中葉の墓。７世紀の集落造営とともに馬飼開始。丹後平古墳群（八戸市）の馬の墓（７世紀末葉～８世紀初頭)。馬飼文化の移入。

（5）**馬飼の伝統**：蝦夷は同時期の北海道の人々と同系だったという説は成立困難。アイヌ民族は馬を飼う文化を持たなかった。大陸からの直接の移入ではなく、古墳文化の延長。

3．上北地方の古代文化

（1）**地理的区分**：**北部**：六ヶ所台地、**中部**：小川原低地と七戸台地、**南部**：三本木・三沢台地

（2）**文化的区分**：

①縄文～古墳時代前期併行続縄文時代（後北C2・D式土器期)：各地に人々の生活。

②７世紀以降：上北南部・中部に集落造営。　③９世紀後葉以降：上北北部にも集落造営。

4．上北地方の自然にあった産物　－馬と鉄－

（1）**馬**：ヤマセや黒ボク土、冬の厳しさ。農耕には多大な努力が必要。馬産、製塩には適する。

（2）**砂鉄**：小川原湖東部の淋代海岸に豊富な砂鉄鉱床。

5．上北北部における新たな文化要素の出現とその由来

（1）**石組カマド**：７世紀の上北南部の集落増加時にはない。９世紀前半に米代川流域に見られるようになり、９世紀後葉以降に津軽の一部、上北北部に出現。信濃、上野の古代馬産地では５世紀以降あり。

（2）**掘立柱建物付竪穴住居**：竪穴住居南に掘立柱建物を付設。深雪地帯に特有。９世紀後葉以降に米代川流域、津軽地方で築造。10世紀後半、上北北部に出現。古代出羽は陸奥に次ぐ馬産地（『類聚三代格』『延喜式』)。深雪を克服する馬飼の工夫。**特別な馬**を飼った人々の家。10世紀の歌。背景に貴人あり。

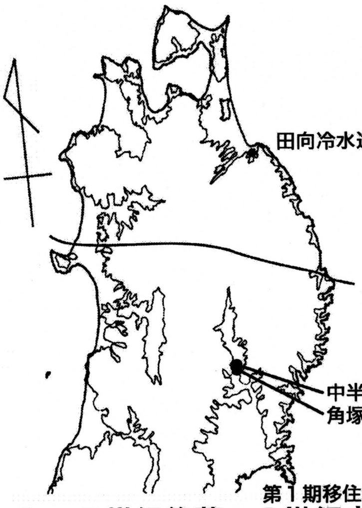
（3）**五所川原産須恵器の使用**：９世紀後葉～10世紀後葉。津軽地方、米代川上流域、上北地方。

6．尾駮の牧は六ヶ所村域にあったか

六ヶ所村域の自然環境：馬産が最も有力な産業。他には砂鉄の採掘と運搬の中継。古代に馬が飼われていた可能性が高い。稀有な出土品や現在の地名から考えると六ヶ所村を含む上北北部が有力。

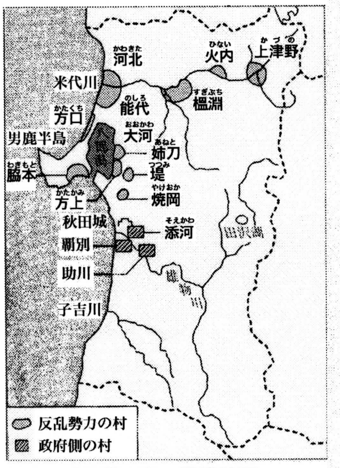
7．まとめと今後の展望

六ヶ所村を含む地域に尾駮の牧があった可能性は高い。地名の誕生と定着過程についての考察が必要。



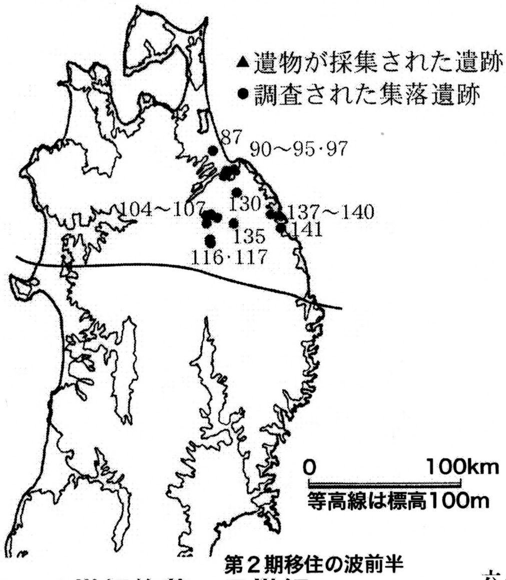
第１期移住の波

1.　５世紀後葉～６世紀中葉



「元慶の乱」関連地図
新野新吉（1981）『古代史上の秋田』
秋田魁新報社を改変
『青森県史 資料編考古３弥生～古代』
「図Ⅲ-13-1元慶の乱地図」より

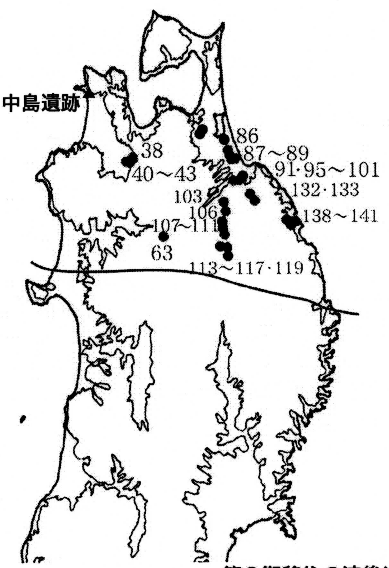
第１図　古代史に登場する「蝦夷の村」など
青森県史編さん考古部会（2005）「図Ⅲ-1-3-2　蝦夷の村」
『青森県史 資料編考古３弥生～古代』335頁より



第２期移住の波前半

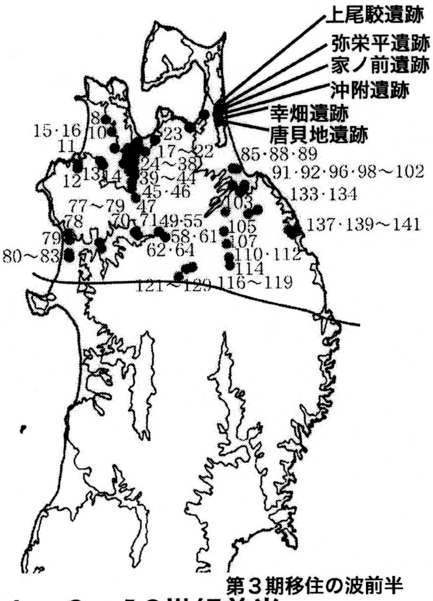
2.　６世紀後葉～７世紀

六ヶ所村域の集落は、すべて９世紀後葉、10世紀初頭以降に造営された



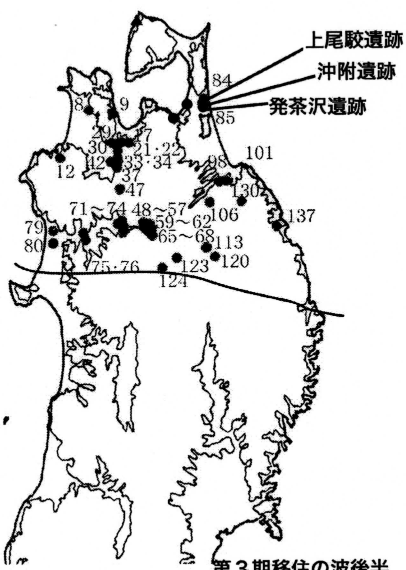
第２期移住の波後半

3.　８世紀



第３期移住の波前半

4.　９～10世紀前半



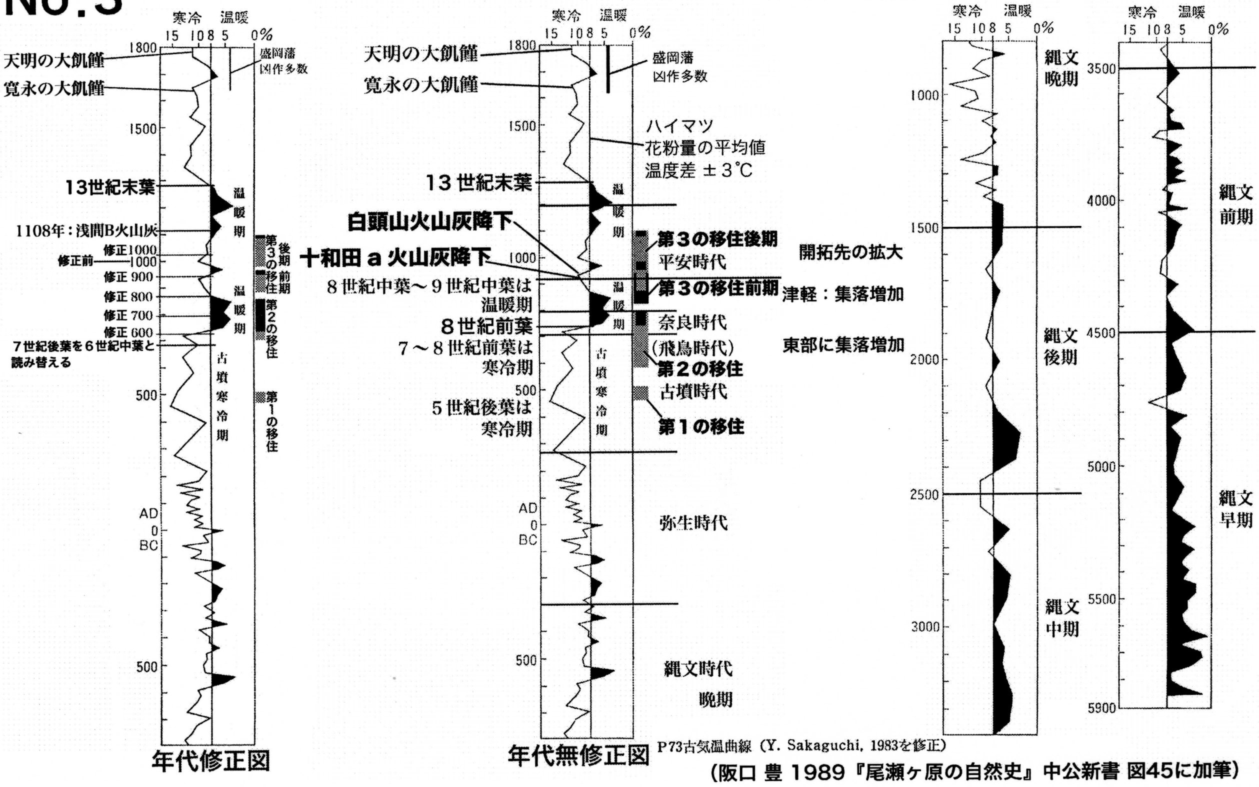
第３期移住の波後半

5.　10世紀後半～11世紀

松本建速2006『蝦夷の考古学』同成社 図12・13・19・20に加筆

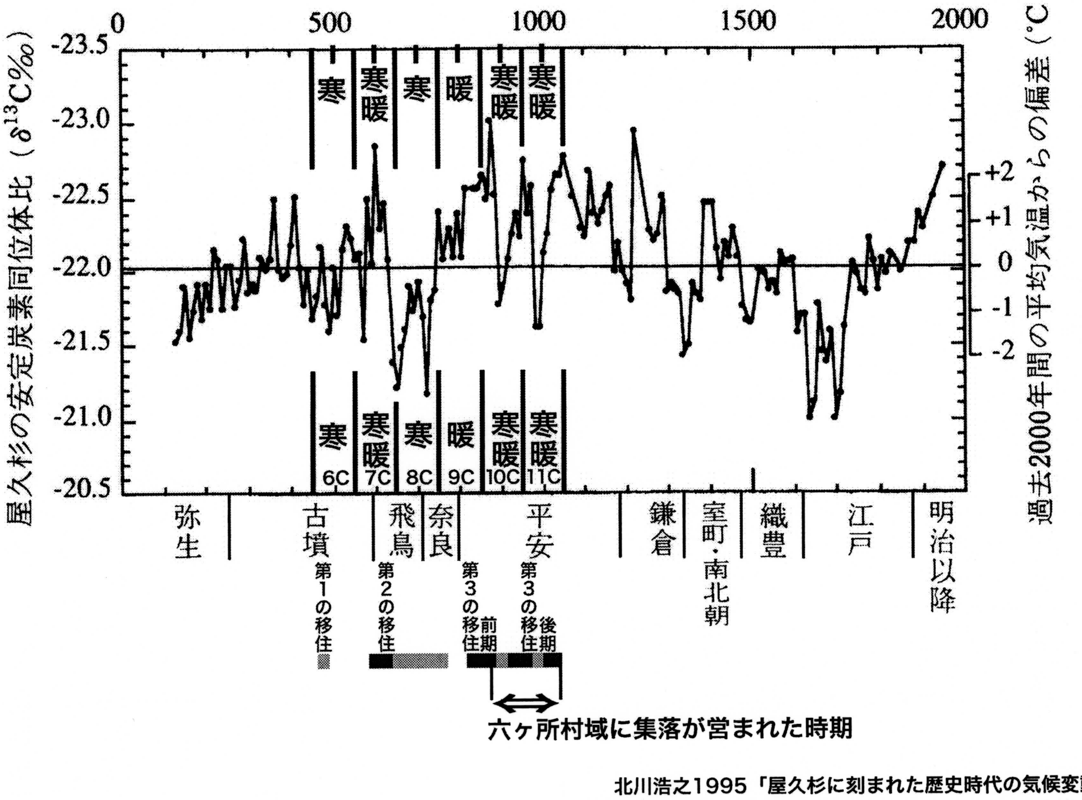
第２図　東北北部の集落遺跡分布

No.3



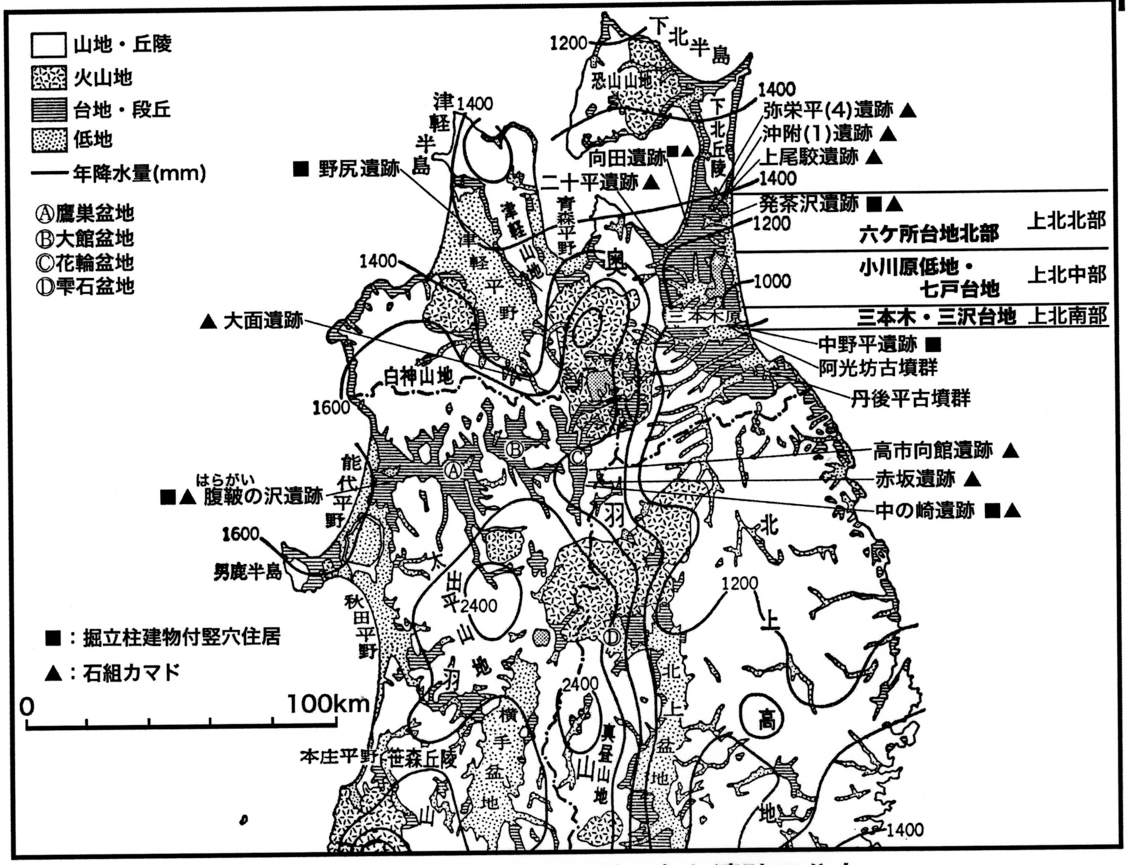
（阪口 豊 1989『尾瀬ヶ原の自然史』中公新書 図45に加筆）

第３図　群馬県尾瀬ヶ原湿原試料によって推定された過去7800年間の古気温曲線



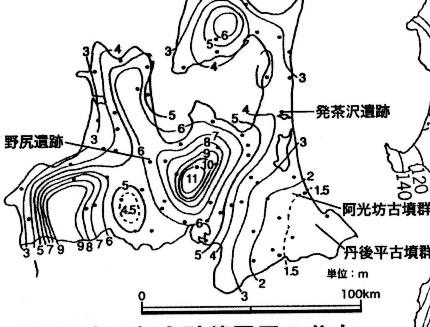
北川浩之1995「屋久杉に刻まれた歴史時代の気候変動」
『講座文明と環境 6 歴史と気候』朝倉書店 図2.3に文字等を加筆

第４図　屋久杉の安定炭素同位体比による気候復元

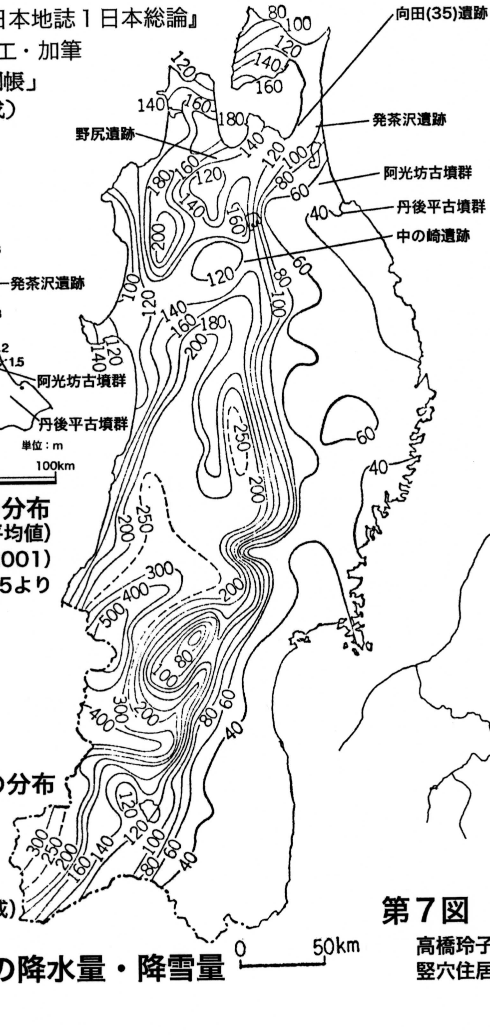


第5図　東北北部の地形と主な遺跡の分布

二宮書店発行（1980）『日本地誌１日本総論』
「図147東北の自然」を加工・加筆
（国土地理院「日本国勢地図帳」
により日本地誌研究所作成）



1. 青森県内の年合計積雪量の分布
(1961～70年の平均値)
青森県史編さん自然部会（2001）
『青森県史 自然編 地学』図IV.2.15より



2. 東北地方の１月の降水量の分布

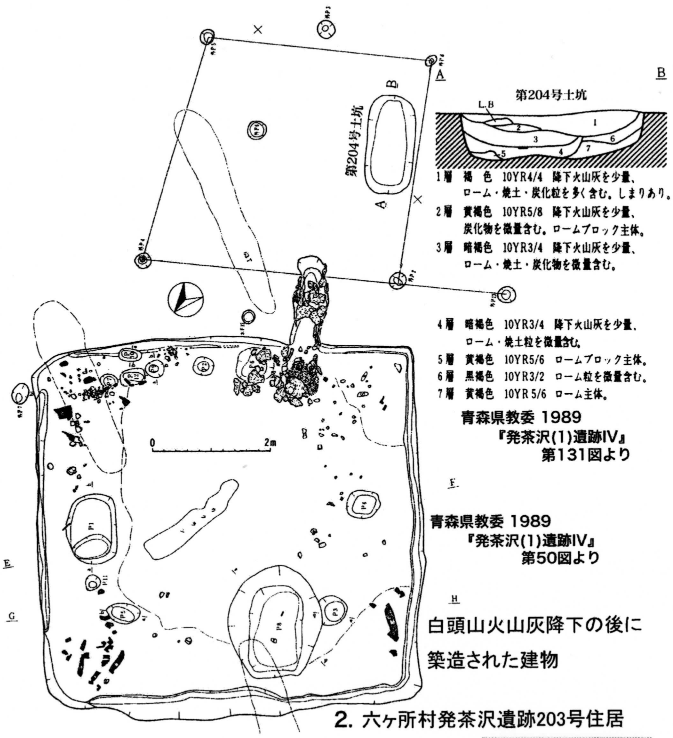
（「気象庁観測技術資料」第13号
1959 により吉野正敏・設楽 寛作成）

第6図　東北地方の降水量・降雪量

第7図　掘立柱建物付竪穴住居の分布

高橋玲子 2001「平安時代東北地方における掘立柱施設付竪穴住居について」『秋田考古学』47号 図２に加筆

1. 鹿角市中の崎遺跡　掘立柱建物付竪穴住居
秋田県教委 1984『東北縦貫自動車道発掘調査報告書VII』「中の崎遺跡」
第83図と114図を合成

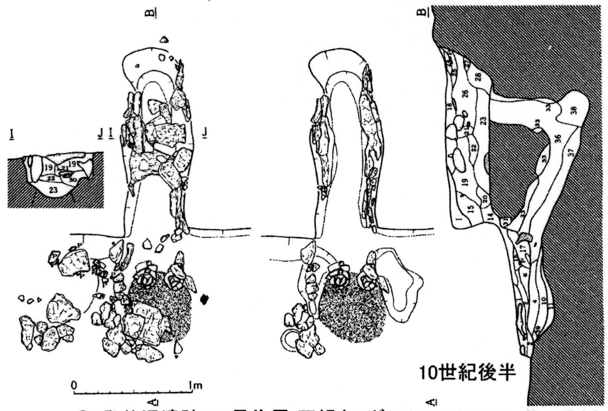


青森県教委 1989
『発茶沢(1)遺跡IV』
第131図より

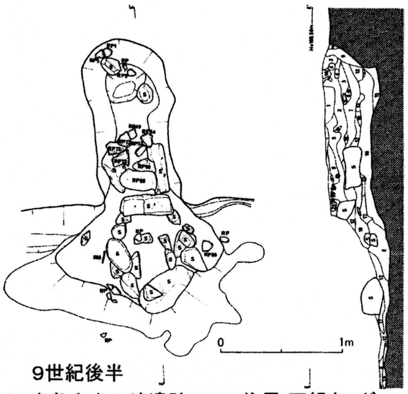
青森県教委 1989
『発茶沢(1)遺跡IV』
第50図より

白頭山火山灰降下の後に
築造された建物

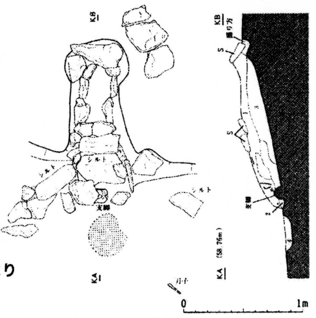
2. 六ヶ所村発茶沢遺跡203号住居



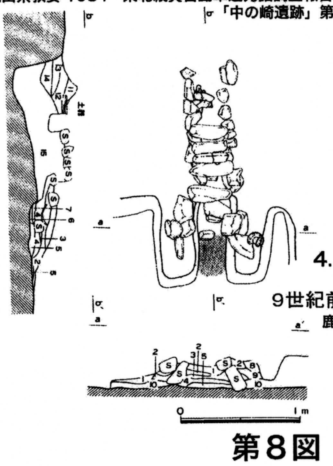
6. 発茶沢遺跡203号住居 石組カマド 青森県教委 1989　第49図より



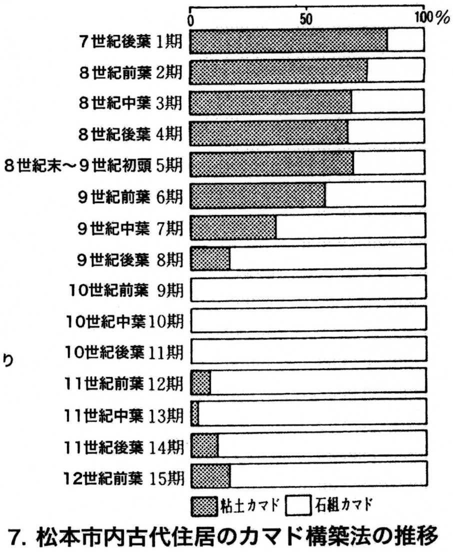
3. 鹿角市中の崎遺跡SI 003住居 石組カマド
秋田県教委 1984『東北縦貫自動車道発掘調査報告書VII』
「中の崎遺跡」第14図より



5. 六ヶ所村弥栄平(4)遺跡石組カマド
18号住居　9世紀後葉～10世紀初頭
青森県教委 1987『弥栄平(4)(5)遺跡』第58図より

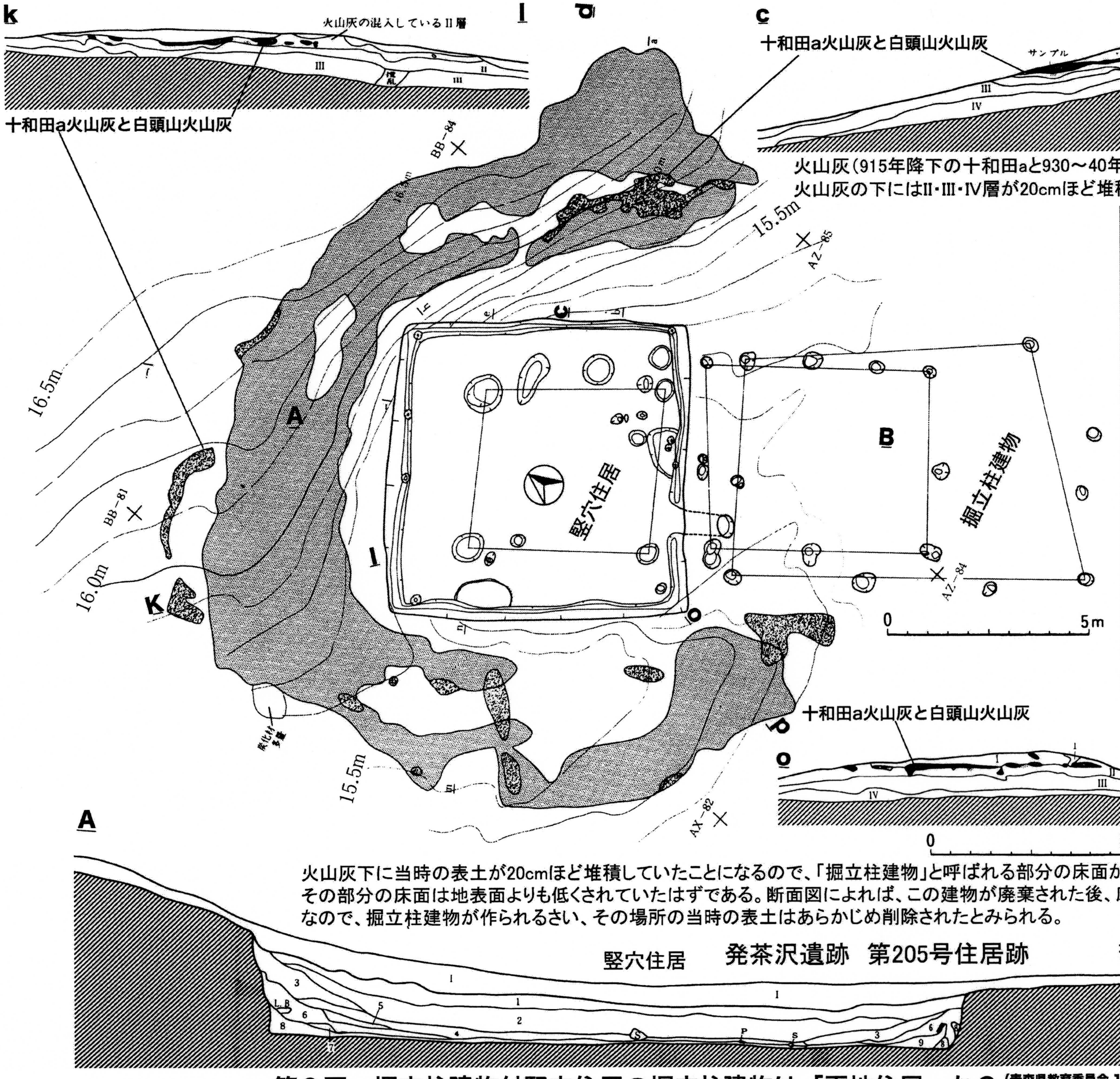


4. 鹿角市高市向館遺跡石組カマド
31号住居
9世紀前半
鹿角市教委 1982『高市向館跡発掘調査報告書』
第37図より

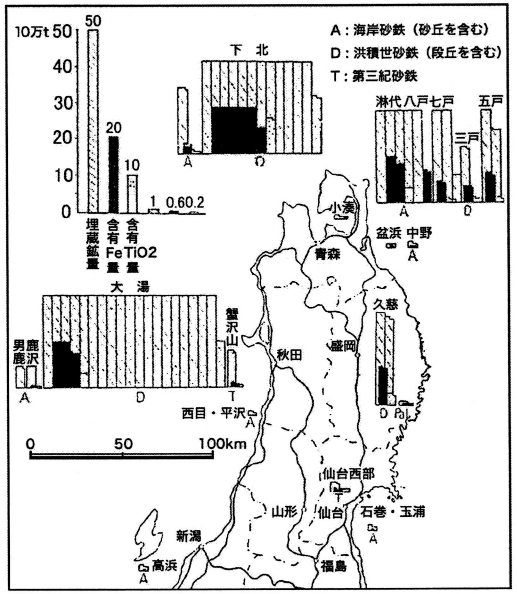


7. 松本市内古代住居のカマド構築法の推移
長野県教委 1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—総論編』第22図より

第8図　掘立柱建物付竪穴住居と石組カマド



第９図　掘立柱建物付竪穴住居の掘立柱建物は「平地住居」か？（青森県教育委員会 1989『発茶沢(1)遺跡IV』図61・63・64を加工）



第10図　砂鉄の埋蔵量分布図
（通産省編1960『未利用鉄資源』６輯
32頁　第30図より一部を抜粋）